

イエス様が、ペトロとヤコブとヨハネを連れて高い山から下りて来られると、弟子達が大量の群集に取り囲まれてなにやら律法学者たちと議論していました。律法学者はイエス様がキリストでない証拠を得ようと「奇跡を起こして見ろ」とずっと追いかけて来たのかもしれませんが。「イエスが神の子なら病人を癒せるはずだ。お前たちがあれの弟子なら、この子の病気がらい癒してやれ。この子も親父もこんなに困っているんだ」とけしかけていたのでしょう。

そこで、イエス様が「何を議論しているのか」とお尋ねになりました。父親が「お出来になりますなら、助けてください」と言うときイエス様は、「出来ればと言うのか、信じる者には何でも出来る」と言われました。「信じる者は」でなく「信じる者には」となっているところが大事です。父親はすぐに「信じます。信仰のない私をお助け下さい」と叫びました。イエス様は父親の息子の病気を癒しておやりになりました。そして弟子達に、「この種のものは祈りによらなければ」と言われました。原文では、「もし、祈りが無いなら」で、自分達の力で解決できると考えることの過ちを指摘されたのではないのでしょうか。助けを必要としている人をイエス様の所へお連れすることしかできないのです。

テモテ第二の手紙2:23に「愚かで無知な議論を避けなさい。あなたも知っているとおおり、そのような議論は争いのもとになります」と書かれています。教育学者ボルノー著「対話への教育」に議論は自分の意見を相手にぶつけるだけで、交渉は、妥協して一致点を捜そうとするが、それらと全く違うのが対話であると記されています。対話とは、もしかすると自分の方が間違っているかもしれないという可能性を常に残して相手の言うことを聞くことであると言っています。私達が失敗するのは、相手を変えようとして話すからであって、変わらなければならないのは自分なのです。

イエス様が、「信じる者には何でも出来る」と言われたのも、イエス様の力を受け取る準備ができていのかどうか問われています。私たちには祈ることが許され、残されているのです。人間の力を超えた偉大な力に対して、謙虚になり、解決の道を委ね、祈りましょう。議論したり、知識や技術を身につけて解決することだけに熱中せず、開かれた可能性に心も体も開いて、自分のことも、助けを必要としている隣人のことも祈りましょう。どんなに難しい問題でもイエス様の処に持って行きましょう